

〈アッシジの聖フランチェスコ〉を より楽しむために

小沼純一

読響は今年11月、創立55周年の一大プロジェクトとして、メシアン（1908～92）唯一の歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉に、常任指揮者カンブルランと挑みます（演奏会形式・全曲日本初演）。本公演に向けて、本誌ではメシアンに関する特集を「アッシジへの道」として連載しています。第5回の今回は、本公演をより楽しむために、アッシジの聖フランチェスコが題材の本や映画などを紹介します。（編集部）

アッシジの聖フランチェスコは、派手ではないながらも、もっとも人気のあるキリスト教の聖人です。清貧を説き小鳥たちとことばを交わす姿は、しばしば東洋的と言われることもあります。

メシアンのオペラは巨大な編成のオーケストラを要し、4時間を超える長大な作品です。しかし、そこにあるのは山あり谷ありのドラマではなく、地上的というよりは天上的な時間を聴き手が体験できる作品＝場です。

聖フランチェスコの人生をオペラはたどるわけではありません。八つのエピソードにかぎって、教会のステンドグラスのように提示します。そうした意味では、オペラだけではかならずしもこの聖人について知ることができません。聖フランチェスコのエピソードをいろいろ知っているキリスト教文化

圏と、そうしたものとあまり縁がないのとでは、どうしても違いがでてきてしまいます。ですから、あらかじめ聖人の全体像に漠然とでもふれておくといいのではないのでしょうか。

ちいさな絵本

聖フランチェスコについて知りたい、と尋ねられたら、すぐ脳裡に浮かぶ本があります。名作『パシユラルセ^{のうり}んせい』で知られる、はらだたけひでによる『フランチェスコ』（すえもりブックス、1992 現在は富山房インターナショナルより刊行）という絵本です。正方形の画面のなか、つねに淡い色調で、フランチェスコの姿はけっして大仰に描かれません。ことばはす

くなく、詩のようで、簡潔にこの聖人、いえ、人としての姿を伝えてくれます。手のひらよりすこし大きな判型で、この本じたいが「小鳥たちに」と献辞があります。小さく、また薄い本なので、何度も読みかえすのに適しています。

映画では

絵や図像があると「イメージ」がかたまってしまう、ということがあります。でも、それだけにイメージしやすくなったりする。ジョットやチマブーエが描いた聖フランチェスコ像は何百年ものあいだ、この聖人のイメージを、アッシジという土地の姿とともに、与えつづけてきました。

20世紀になると、絵よりも映画が、よりイメージをつよく残してくれるようになりました。そこでは生身の人が

聖人を演じてくれます。

『カサブランカ』『ホワイト・クリスマス』の監督 M. カーティスは『剣と十字架』（1961）を撮っています。『十戒』や『ベン・

ハー』のようにキリスト教とつながりのある映画はハリウッドでも多く作られ、これもそのひとつです。裕福な生まれの主人公が神の声を聴き、自らの道を歩む。そのあいだには親や友人との葛藤があり、教皇との会見があり、病いがある、最期が訪れます。わかりやすく、またエンタテインメントとしても観ることができる作品です。

ヴェルディのオペラ〈椿姫〉の演出でも知られる F. ゼフィレリ監督の『ブラザー・サン シスター・ムーン』（1972）は、自然の風景が美しく、またエン

ディングに法皇との会見を据え、ひとつの^{のど}希みの成就を描きだす青春映画です。いつもうたを口ずさんでいたという聖フランチェスコだからでしょう、フォーク＝ロック歌手のドノヴァンのうたが全篇にひびきます。

こうしたカラー作品に対して、白黒で地味ではありますが、もっとも中世イタリアの聖フランチェスコを、フランチェスコのみならずその「兄弟たち」を虚飾なく描きだしたのは、ロベルト・ロッセリーニ監督の『神の道化師、フランチェスコ』（1950）にほかなりま



『ブラザー・サン シスター・ムーン』
DVD 発売中 1,429円＋税 発売元：
NBCユニバーサル・エンターテイメント（7月1日現在）



『剣と十字架』
DVD 発売中 1,800円＋税 20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン ©2011 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC. All Rights Reserved.

おおきな絵本

最後にもうひとつ、絵本を紹介して本稿を閉じることしましょう。藤城清治『アッシジの聖フランシスコ』（女子パウロ会、2016）です。50代より上の方にとって、藤城清治の影絵は親しみのあるものではないでしょうか。今年93歳を迎えた画家が、昨年、21年の歳月をかけて完成させた絵本は、大判でドラマティック、どこかステンドグラスを想わせる色合いを持っています。



『アッシジの聖フランシスコ』
2016 ©Seiji Fujishiro/Horipro

おなじ聖フランチェスコといっても、そのあらわれはさまざまです。聖人をどのようにうけとったかによって、その描き方も変わってきます。そうした意味では、いろいろな人によるいろいろな聖フランチェスコにふれてみるといいのかもしれません。

（こぬま じゅんいち・
音楽、文芸批評家／早稲田大学教授）

次回は9月号に掲載します

せん。脚本は監督とフェデリコ・フェリーニの共同で、音楽を手掛けているのは弟のレンツォ・ロッセリーニ。フランチェスコを特権化せず、そばにいる人たちを大切にし、ともに清貧のなかで神に祈る生活を描いた名作です。

ことばで描かれた

多くのことばが聖フランチェスコに費やされてきました。13世紀の『黄金伝説』や『聖フランチェスコの小さな花』といった同時代のものから現在まで。ここでは小説をいくつか紹介してみしましょう。

まずよく知られている作家のなかでは、H. ヘッセ『アッシジの聖フランチェスコ』（全集第2巻、ヘルマン・ヘッセ友の会・研究会訳、臨川書店、2007）を挙げておきましょう。作家自身が共感をもっている作品として知られています。

明朗な性格だと伝えられる聖フランチェスコの苦悩する面を打ち出し、また、小説のつくりがしっかりしているのはギリシャ出身N. カザンツァキの『アッシジの貧者』（清水茂訳、みすず書房、1981）でしょう。

『『カナリアは人間の魂みたいだ』と、とうとう彼はつぶやいた。『周囲の檻の格子を見ているが、絶望せず、うた

っている。うたっていると、きっと、兄弟レオーネ、ある日、その歌が格子をうち砕くだろう』

兄弟レオーネが聖者について書き記すというスタイルをとっているこの小説は、作家自身が第二次大戦後にヨーロッパ各地を放浪せざるをえなかったことをも重ねているのかもしれません。

C. ボバン『いと低きもの 小説・聖フランチェスコの生涯』（中条省平訳、平凡社、1995）は比較的新しい本です。「彼は燕たちに話しかけ、狼たちと語りあう。石との集いに顔を出し、木々との討論会を開催する。全宇宙と話しあうのだ。なぜなら、すべての存在は愛のなかに言葉の力を持っているから、並外れた愛のなかではすべての存在に意味があるから」

小さな本ですが、フランスで賞も受け、多くの人に読まれたものです。ただストーリーを語るのではなく、聖フランチェスコのことをいろいろ考察しながら書きしるし、それはまた、20世紀末から現在に生きる人たちが自分のこととして考えることができるものになっています。

音楽で

メシアン以前でも、聖フランチェスコはいくつもの音楽に登場します。も

ともと音楽を愛し、のこされたのはわずかですが、詩も書いていたフランチェスコです、音楽とつながってくることに違和感はありません。もちろん小鳥との会話も、うた、だったのでしょうし。

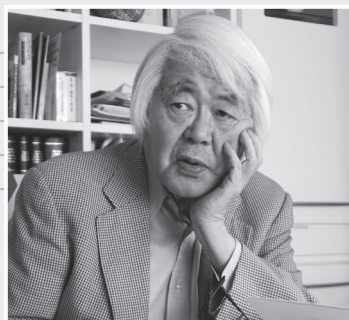
もっともよく知られているのは、リストのピアノ曲〈（二つの）伝説〉（1863）にちがいありません。この第1曲が“小鳥に説教する聖フランチェスコ”です。華やかなピアニストとして活動していたリストは晩年、1865年に僧籍にはいります。その頃には宗教的な作品がいくつも書かれ、聖フランチェスコのことは特に気に入っていたのでしょうか、ほかにも合唱曲があります。

プーランクには〈アッシジの聖フランチェスコの小さな祈り〉（1948）があります。^{けいけん}敬虔なカトリック信者だったプーランクにはいくつも宗教作品がありますけれど、これはフランシスコ会^{おい}の修道士だった甥ジェロームの依頼で作曲された男声合唱曲で、聖フランチェスコのことばがテキストとして用いられています。

グバイドゥーリナの〈太陽の讃歌〉（1997）も、聖フランチェスコのことばによっています。名チェリスト・ロストロポーヴィチの70歳を祝した作品で、その力づよさと確信に満ちたたびきがとても印象にのこる作品です。

日本とメシアン

● 船山 隆さんインタビュー



メシアンの〈アッシジの聖フランチェスコ〉日本初演（抜粋）は1986年3月12、13日、東京カテドラル聖マリア大聖堂で、小澤征爾の指揮、新日本フィルハーモニー交響楽団の演奏で行われた。初演に立ち会うため来日した作曲家は、3月14日に東京日仏学院で開かれた講演会で自作について熱弁をふるった。その時、聞き手を務めた音楽評論家の船山隆さん（東京芸術大学名誉教授）に、作曲家にまつわる思い出を語ってもらった。

メシアンを初めて見たのは1962年7月、出来たばかりの東京文化会館で、小澤征爾さんがNHK交響楽団を指揮して〈トゥーランガリラ交響曲〉を日本初演した時です。まだ大学生だった私は、終演後に小澤さんが客席に駆け降り、作曲家の手を取って舞台上上がる姿を4階席から目を凝らして眺めていました。

85年11月、京セラの稲盛和夫さんによって創設された第1回「京都賞」の思想・芸術部門受賞者にメシアンが選ばれ、ピアニストのイヴォンヌ・ロリオ夫人を伴って来日しました。作曲家の諸井誠さんと共に選考に携わった私は、夫妻を京都で出迎え、授賞記念シンポジウムの司会をしました。

メシアンのスピーチは堂に入ったも

のでした。作曲家のブーレーズ、シュトックハウゼン、クセナキスらそうそうたる教え子の名を挙げた後、こう言ったのです。「私は彼らの内的な聴取に細心の注意を払いました。私自身のことは忘れるように努力し、彼らの内部にリズム的な動揺を目覚めさせ、彼ら独自の道を発見するのを助けるように努力しました」。作曲家としてだけでなく、実に謙虚で理想的な教師でもありました。

自然と芸術の関わりを重視するなど日本人の自然観に共鳴するところも大きかった。メシアンにおける自然の象徴は鳥ですが、62年の初来日時に日本の鳥の鳴き声を採譜して作った〈七つの俳諧〉という作品があります。

メシアンの作品は、〈前奏曲集〉や

〈世の終わりのための四重奏曲〉などが作曲家の武満徹さんやピアニストの園田高弘さんらによる「実験工房」によって1950年代のはじめにいち早く紹介されました。また別宮貞雄さんや篠原真さんら直接師事した作曲家も大勢います。温厚な人柄で、夫人とも仲睦まじく、夫妻を^{むつ}梶尾の高山寺に案内した際、首に巻いた夫人手編みの長いマフラーを盛んに自慢していたのが微笑ましかったです。

4か月後の86年3月、〈アッシジ〉日本初演のために再来日した夫妻を東京で迎えました。2回の公演に詰めかけた聴衆の熱狂ぶりはすごかった。翌日の講演会は当初、質疑応答の形で進める予定でしたが、聴き手の私が質問を差し挟む間もなく、メシアンは作品について熱弁を振るい、オペラの作曲を長年^{ちゅうちよ}躊躇していたものの、8年かけてようやく完成させたことなどを滔々^{とうとう}と語った後、こう締めくくりました。

「私は作曲家として困難に直面しています。それは第一にリズム、第二に鳥の声、第三に色聴、第四にキリスト教の信仰です。これらについて聴衆は十分に理解してくれないことが多い。しかし、それらは私にとって真実かつ真剣なものである、聴き手がキリスト教徒でなくても何らかのメッセージは



1986年3月14日、東京日仏学院での講演会の様子
©林喜代種

伝わると思います。太陽が何であるかを知らずとも、陽の光を浴びれば、それを体で受け止めてしまうのと似ています」

あらゆることに誠実な人でした。講演会後、すぐ帰国するというので、「もっとゆっくり滞在されては」と申し上げたら、「いや、数日後に議会総選挙があるんだ」と。それがメシアンと直接言葉を交わした最後でした。

メシアンが亡くなって半年ほど経った92年12月、私はパリのオペラ・バステューでシルヴァン・カンブルラン指揮の〈アッシジ〉を観ました。劇場で偶然、ロリオ夫人と再会したのですが、私はその時、〈アッシジ〉を全曲聴き、初めてその真価に触れた気がしました。この20世紀最高のオペラの一つは、何度も繰り返し聴くことで、ようやくその真の姿を明らかにするのです。（聞き手・事務局）